

元気で躍進 地域経済

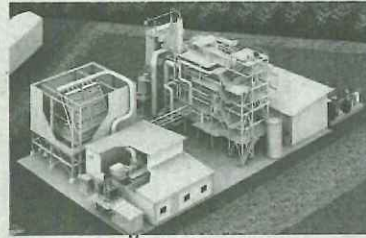
バイオマスパワーテクノロジー(株) (BPT)、本社(松阪市小片野町、北角強代表取締役)とホクト(株) (本社(長野市、水野雅代表取締役社長) など6社でつくるバイオエイド三重合同会社 (本社(小片野町、職務執行者(西川弘純) BPT取締役最高技術責任者・発電プラント所長) が26日、松阪市木の郷町のウッドピア松阪内、ホクト三重のセンターから排出される使用済み培地(廃菌床)を主燃料とした完全NON-FIT型ハイブリッド発電所「バイオエイド三重シン・バイオマス(松阪発電所)」の地鎮祭を行った。2025(令和7)年1月の稼働を目指す。

バイオエイド三重 ホクトの廃菌床で発電

シン・バイオマス
発電所建設
再来年1月に稼働



儀式を終えてあいさつする西川職務執行者
木の郷町の発電所建設予定地で



バイオエイド三重シン・バイオマス(松阪発電所)の完成予想図

バイオエイド三重は、大成産業(株) (松阪市久保町)、BPTとホクト、三重エネウッド(株) (小片野町)、郡大台町新田、R.E.諏訪湖(株) (長野県諏訪市) の6社で21(令和3)年7月に設立。日本アジア投資(株)、(株)長谷工コーポ

レーション、(株)BMエコモ、(株)レクスポート、J A三井リース(株)の5社が出資する。

バイオエイド三重シン・バイオマス(松阪発電所)は、ホクト三重のセンターから排出される使用済み培地を主燃料に、中部圏一円で排出されるリサイクル木材チップとプラスチック系資源も使用。発電された電力は15年間にわたりホクトに供給される。再生可能エネルギーで発電した電気を、電力会社が一定価

格で一定期間買い取ることを国が約束するFIT制度は使わず、完全NON-FIT型で、しかも燃料として製造業由来の生産副産物を活用するのは珍しい。

「木材以外の」まだまだ使われていない未利用の資源がたくさんある。こういったものを全て使って真なる循環型社会の形成につなげていく(西川職務執行者)との思いから「シン・バイオマス」という言葉を商標登録したという。

発電施設は(株)タクマ製ハイブリッド燃焼対応型トラベリングストーカ式ボイラで、発電規模は1990キロワット。年間想定発電量は約1647万キロワット(想定総電量は約1515万キロワット時)。ホクトとしては、この電力を利用することでキノコ生産時に排出される温室効果ガス(CO2)を大幅に低減することができる。総事業費は約25億円で、10月に起工し、再来年1月の稼働を見込む。建設工事は(株)西川建設

(松阪市大黒田町、西川信吾代表取締役)が請け負う。この日午後1時半から現地で行われた地鎮祭には、西川職務執行者(33)やホクトの稲富聡取締役生産本部長、松田石油の松田金葉代表取締役社長、タクマの内田雅紀エネルギー本部プランニング2部部長、(株)みずほ銀行の西島洋行大阪法人第一部部长、西川建設の西川代表取締役、ウッドピア松阪協同組合の工藤剛事務局長ら約60人が出

席。西島部長が祝辞で非常に社会意義の大きいすてきな取り組みだとわれわれも思っている」とたたえ、内田部長も「SDGsのお手本のような事業に参加させてもらって光栄」と事業への期待感を語った。その後、西川職務執行者があいさつし「真なる循環型社会の形成というシン・バイオマスのコンセプトを持ってしっかりと事業を展開していきたい」と意気込んだ。